令和２年度　初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会　（高校普通科）　第２回　　議事録（案）

日時	令和 2 年 12 月 23 日（水）9：30～11：30
場所	Zoom 会議室
委員	宍戸 学　　日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【総括座長】 高嶋 竜平　　法政大学国際高等学校 教諭 中村 太悟　　学校法人希望が丘学園鳳凰高等学校 教諭 村上 和夫　　立教大学 名誉教授【座長】 中野 憲　　株式会社 JTB 教育事業ソリューションセンター センター長 原　一樹　　京都外国語大学 国際貢献学部グローバル観光学科　教授 （氏名五十音順・敬称略）

１．開会･挨拶

初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会　分科会（高校普通科）　第２回
議事録

１．開会・挨拶
〇観光庁・刀根
　観光庁の刀根と申します。よろしくお願いいたします。
　今年度初めて、観光庁で観光教育の協議会を開催しておりまして、観光教育の意義、目的や、学校の先生にどう伝えていくかを議論して、来年度から実証事業に入るようなスケジュールで進めています。
　村上先生からは色々お話をお伺いしておりまして、哲学が教育に大切だということで色々勉強しておりまして、今日はお話をお伺いできることをとても楽しみにしております。
　よろしくお願いいたします。

２．討議事項に関する説明
〇事務局・MURC 平川
（資料説明）

〇日本大学・宍戸委員
・他の分科会の議論を紹介すると、全体像みたいなところがこの協議会の最初のところでも議論があって、小中校、専門学科も含めて、色んな観光教育がある中で、どのように我々が把握して、それを伝えていくかということがあったので、これが今年度の捉え方として大事だということになっています。
ただ、小中学校等では、分断されているというかつながりなないので、もう少しらせん状型につなげた方がいいのではないか等、形にこだわりがあって、そのあたりの考え方があるのではない

かという話がありました。

小中の教育と高校の普通科は、スタンスやコンセプトについて共有する部分が多くあって、一方で専門教育はプラスαみたいな形で示されています。実務的なところが少し強くなることは当然なのですが、専門教育の中でも、同じ学校内に普通科があったり、コースの中で観光コースを選択しない学生もいる中で、差別化というか違いが表れています。

観光教育を学んでいる学生たちは、積極的に地域と関わっていったりする資質がかなり身についているのではないかということがあって、それは、普通科教育に取り入れられることもあるでしょうし、観光業界に就職する子ばかりでもないので、専門教育によっても、普通科的な要素を兼ね備えている部分が結果としてあるだろうという話にはなりました。

最終的に、どのように全体像を俯瞰できる見えてくることが大事だと感じており、この形がいいかどうかはわからないのですが、我々が、なるべく分かりやすく表現していかないと、生徒たち、先生方、業界の方、保護者の方等に、観光教育が何かが伝わりづらいと思います。

この図をどうするかということについて、大事かどうか分かりませんが、皆さん頭を悩ませているので、そこが１つ議論としてあると思います。

専門教育については、観光教育が商業ビジネスの中に入ってきますので、先行して、これをいかに効果的に進めていくかということが不可欠なので、来年度以降の施策のところでも、具体的にこんなことをやったらどうか、ということが専門学校の中では出てきたと思います。

３．話題提供

〇立教大学・村上委員

高校普通科教育課程の位置づけは、すごく曖昧でありながら、大学や社会とつながっていく可能性があるところなので、そのことを我々は踏まえないといけないと思っています。高校の専門科も社会とつながっていくことを踏まえないといけないということもあるでしょう。そういう意味では、少し、大学っぽいものの考え方、あるいは生き方が最終的な落としどころになっていて、大学や専門学校に進学した時に、あるいはそのまま社会に出た時に、ショックがないように、あ、これ考えたことがあるな、という考えを得られるように、観光教育をしていきたいと思っています。

それを考えると、個人の生き方や身構え方が非常に重要で、それを抜きに考えることはできません。特に、観光がヨーロッパで教育がスタートしていった時に、彼らは、職業教育としてスタートをしていくのですが、職業教育を支えている大きな政治のフレームがあり、それが今回のコロナで明確に見えてきています。それが、日本とものすごく違うという状況があります。日本の特性を生かしながら、日本の中で観光を使って生きていく人物像はどうあるべきかを議論していく必要があると思っています。

話が抽象的で申し訳ないのですが、こういう事例があるので、観光教育とは関係なさそうだけど、少し足を延ばして、自分たちの守備範囲に入れておきたいという話を本日はしていただければと思っています。

子どもたちの考えていることと、業者がやっていることは違うとか、昔の人がやっていてそれは下品だと言われていたけど、今は上品なものの中に入っているとか、そのような事例を挙げていただいてもかまいません。それとの関係性を、あとで議論をしながらつなげようと思っています。色んな事例を出していただきつつ、今日の議論を進めたいと考えています。

テーマとしては抽象的ですが、我々が目に見えているもの、そんなことを話ながら進めていきたいと思っております。

まずは原先生に、今 16 歳の生徒が 40 歳になった時を描きながら、どうやってライフデザインを学んだらいいのかを 1 つのキーにしながら、色んな話題を出していただければと思っています。

○京都外国語大学・原氏

・（論点提示）

○立教大学・村上委員

ありがとうございました。ご質問等あればお願いします。

○事務局・MURC 平川

大学でよくリベラルアーツという言葉があると思うのですが、小中学校や高校の段階に落とし込むようなイメージになるのでしょうか。物事を多角的に判断できる幅広い教養といいますか。

○京都外国語大学・原氏

ベースということで、生きる力になるのでしょうか。教養の問題も結構難しいですよね。まず、何かを知ろうとか、何かを知らないという、自覚のレベルがもやっとしている場合が多いと思います。知識を持てば持つほど、もっと知りたくなるでしょ、ということを、どこで教えればいいのだろうと思います。

あれもこれも教えるのは簡単ですが、教養は分かっていることと分かっていないことがあって、知れば知るほど面白くなるでしょということは、小中高のどこで教えるものでしょうか。科目で教えられるものなのかでしょうか。

○立教大学・村上委員

それは科目で教えられるものではなくて、偏差値の違いや学校によって違うと思います。

偏差値のそれほど高くない学校は、教養というよりも、身体知で教えていくことがあって、そういう意味では非常に幅広いです。一方、極めて偏差値の高い学校は、システム化されています。

一番良くないのは、中の上ぐらいの学校で、受験で、第１志望は受からないけど、第２志望でまあまあいいところが受かればいいという学校だと、教養がいい加減になってしまって、まとまりがない状況になってしまいます。

そのため、もし教養に定義があれば、それを教えることがいいのですが、今、政治状況的にリベラルがダメだという状況なので、ちょっと難しいかもしれません。クリティカルとリベラルを一緒にすると批判だと思う人がいるのですが、そうではないということですね。何かいいアイデアはありませんか。

○京都外国語大学・原氏

視点を広げると、哲学や倫理学といった教育も日本にはあまりないわけですよね。今後、何か断片的な知識を持ったところで、知識は更新されていってしまうので、自分に何が足りなくて、世の中としてはこれが必要だからこうと動けたりする、その体力が教養といった方がいいと思い

ます。カントンもデカルトも知っていること自体もいいのですが、「そうではないだろう」ということはどこでどうすればいいのだろう。枠として、総合的にどこで教えられのでしょうか。

そもそも、問題を発見することができない人も多いですよね。問題を与えれば、結構答えられることはできて、100 分与えられたら、95 分ぐらいは問題を立てる方に時間を使った方が良くて、問題が立てられたら、あと 5 分で回答はでるわけですよね。なので、問題を立てる力が大事です。問題を立てる力というのは、よく見るとか、観察するとか、当たり前なことになる気がします。

すごく視野を広げるのですが、本質的にはここがポイントだから、ここが問題なのだなと収斂していかないといけないので、拡大と収斂するということを、学科科目として、小中高でやれればいいのかもしれません。

テーマを与えてぼんやり調べ始め、ある程度の情報が集まってきたらここが問題だとなり、そこからスムーズに進める人たちと、放浪していて知識は溜まっていく人たちに分かれます。頭の動き方の訓練というのは、科目教育では難しいのでしょうか。

〇立教大学・村上委員

科目教育でも難しくはないかもしれません。

〇京都外国語大学・原氏

今、またリベラルアーツが流行ってきているのでしょうか。

〇立教大学・村上委員

そうでもない気がします。多分教科ではなくて、比較的入りやすい学校の場合は、そういう仕事は誰がするかというと、生徒部なんですよね。ただ、生徒部の教員は、自分が教養教育をやっているという自覚は全くないと思います。もしかしたら、そういう事例は宍戸先生が知っているかもしれません。

〇日本大学・宍戸委員

今、原先生がおっしゃった理論は、元々、普通科の観光教育が難しいところは、どの科目に位置付けるかということが一番難しくて、逆に言うと、学校教育というのは、基本的に教科が軸になっているので、教科が前提なので、特別活動や、生徒部、学校行事みたいなものなどで、それらはあまり教科としての認識があまりないですね。

強いて言えば、哲学的な話、内省的な話は、私たちの立場だと、倫理社会とか、進学校だったりすると、先生がひたすらそのことを語っていてなるほどと思っていました。高嶋先生どうですしょうか。今、社会科ではあまり哲学的なものは、カリキュラム上あまり取り上げていないような印象があるのですが。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

当校では倫理は設定されていますが、専門的な哲学の内容等は教員の講義によって展開していくことになっており、必修ではありません。高校のカリキュラムとしてリベラルアーツがどう展開するかというと、科目の枠では難しいと思います。

自分の学校に置き換えて考えたのですが、観光教育で１つできるものとして、小中高と学んで

きたもの（国語、算数、理科、社会）は学校の中の枠組みでしかなくて、色んなところでのつながりを見ていった時に、フリーに、教科の枠組みではないところで物事を考えていくことの訓練ができる場ではないでしょうか。

私たちの学校も、学校改革をしていく中で１つやったことが、土曜日は授業を辞めましょうと。私立高校としては、土曜日も授業があって、部活もあってという保護者の期待も多いのですが、部活も日曜は休みにして、土曜日の授業も空けると。

なんのためにそれをやっているかというと、高校生が、人生観が学校の中で成立してしまうのですね。土曜日まで授業で、部活が夜まであって学校にいてということになると、高校生が、教科の枠、学校の枠以外のところで物事を発想したり、社会に参加したりする機会が失われるだろうということで、私立学校の戦略としては、かなりニッチなニーズを狙っていくような感じで、お客さんがうまく集まるかという議論はあったのですがやってみたんですね。

やってみたのですが、小中まで学校がある状態で生きてきた生徒たちが、土曜日が自由になったといったときに、その時間の使い方の発想力が弱いので、これをどう育てていくかは考えなければいけないところです。

〇京都外国語大学・原氏

自由に耐えられないということですよね。昔から言われていますが、人間って自由がきつくて、自由であることを教えないといけないというか、好き勝手していいといっても、わからないのでお題をくださいということになってしまいがちです。それはよろしくないので、非常に良い取り組みだと思います。

好きなものを見つけさせるということを早い段階からやらないと、あまり面白い人が育たないような気がしますよね。逆に言うと、中等教育の中に各科目があるので、各科目を学ぶ意味はなんなのかということをどこで教えているかというと、教えていなかったら箱しかしらないわけですよね。その箱がなぜいるのかという自覚は、どこで学ぶのでしょう。そもそも、なぜ自分は勉強しているのだということは、何も学ばないのでしょうか。考える機会がないのですかね。

〇立教大学・村上委員

考える機会はないと思われます。どうなっているかというと、国際基督教大学が、なぜ英語で学ばなくてはいけないのかという授業を前期いっぱいやるんですよ。これは実は、アクティブラーニングになっているのです。なぜ学ばなければいけないかということを先生が教えないのですが、それがとても重要なのです。

これは、立教でも議論したのですが、立教ではやめました。ただ、大学でもやっています。その理由は、高校までが学ぶ意義は個人と結びつけなくて、社会としか関係ないと、あなたがこうすると社会はこう発展するのですよということは教えるのですが、学ぶとあなたはどういう風に太れるかという話はしないんですね。なので、ＩＣＵはよく頑張ったなと思います。

〇京都外国語大学・原氏

あなたのためにという時は、どうしても個人の個々のためになりますとか、社会に出た時の強み、弱みの話になってしまいがちなのですが、もっと他にあるだろうと思うんですよね。学校の勉強が嫌いでも、外に出て行ったら面白いものがあって、そのためにはこういうものがいるとい

うフィードバックもありうると思います。
　色んな偏差値・学力の子どもがいると思いますが、発見というかポータルというか、そういう位置づけはないでしょうか。

〇立教大学・村上委員
　そうですね。生徒部が困るような学校で、生徒たちが社会人の準備段階として、地域の中で自分が生きてくための身体知を身に着けていく、そこがすごく重要です。段々、その幅が小さくなっていることは確かですね。外で暴れにくく（伸び伸びした活動がしにくく）なっている、怒られる、SNS に悪い部分が出てきてしまうなど。

〇京都外国語大学・原氏
　外の社会とのつながりは作りにくいものなのですか。

〇立教大学・村上委員
　難しくなっていますね。

〇京都外国語大学・原氏
　昔よりも、外に出にくくなっているということなのでしょうか。

〇立教大学・村上委員
　外で暴れにくくなっているのは事実です。一方で、暴れると怒られるので、怒られるのが面倒だから、暴れないようにしようと考えていることも事実です。そうすると、それが手軽なＳＮＳ上に表れてくるという状態です。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員
　そうですね、無難に過ごそうとしている考え方が、土台にはあるだろうと思います。

〇立教大学・村上委員
　ただ、暴れ方を知らないという部分もあるのではないかと思います。観光という枠組みの中であなたが考えていることを語ってみれば、もっと社会とつながるかもしれないし、さらに新たな学びに展開していくことも考えられます。そのぐらいの枠をはめて、色々やってみましょうかということはできるのではないかと思います。

〇京都外国語大学・原氏
　何かは絶対好きなものがあると思います。以前、大学で、プラモデルしか好きなことがない子がいて、プラモデルと観光をつなげて卒論を書いてくれればいいよと言ったら、ガンダムの聖地に行ったりするなどでちょっと広がっていきます。一点突破で、これしか好きなものがないのであれば、それを広げていく手段としては使えると思います。好きなものが一見すると社会とつながっていない、誰にも理解されないとしても、実際にそれを生業としている人もいます。
　オタク系の子もそうですよね。刀剣乱舞しか好きじゃない子もいて、それでしか卒論が書けな

いのですが、でもそれをやることによって、経済効果とか視野が広がっていくので、ピンポイントのその子の興味から社会につながれるのだということは、どの学力帯でもありうると思います。

〇立教大学・村上委員
　原先生のお話の中でも面白かったのは、美意識を磨く話です。

〇京都外国語大学・原氏
　それは大事ですよね。大人は無くなってしまっているので、そこが京都のすごいところで、絶対に他を寄せ付けないというか、フィルタリングがすごいんですよね。全く何も受け入れないわけではなくて、色んなものがあって、京都だからと寄ってくるのですが、これは京都に入れてもいいという判断が最終的にあるのが、なかなか面白い町だと思います。

〇立教大学・村上委員
　京都と滋賀の表裏、京都と神戸の表裏について学ぶことが、最高に面白いですよね。

〇京都外国語大学・原氏
　特に滋賀県は面白いですよね。司馬遼太郎にしても、白洲正子にしても、最後はやはり近江がいいという話になります。

〇立教大学・村上委員
　原先生がいらっしゃる間に、中野センター長のお話をうかがいたいと思います。観光がどうあるべきで、企業のつながりにおいて、どのように広がる可能性があるかという事例について、お話をいただければと思います。

〇株式会社 JTB・中野氏
　今のお話の中で、問う力とか、問うことに９割ぐらいかけた方がいいというお話があったかと思うのですが、現場で色々やっていて、中高生と接して探究学習ということに触れてはいるのですが、問う力、気づく力についてはどこにも疑問が存在していないマジョリティみたいなものを感じるんですね。
　探究学習をしようとか、課題研究をしようという話を、我々一生懸命学校に持っていっていて、それをやっていただける学校も多いのですが、まず最初の研究のテーマも決まらない、ディスカッションどころか、何の問いも出てこなくて、最初の一歩がものすごく踏み出しにくく、当方のスタッフもすごく苦労をしています。
　対極的で包括的なお話をいただき、こういうものを今の高校生にお話しできる講座のようなものがあると、自分の世界がもう１つ膨らむのではないかなと感じました。

・話題提供　未来探究ゼミナール　URL 貼付程度

〇株式会社 JTB・中野氏
　村上先生からバーチャル修学旅行がＳＮＳで話題になっているということをお聞きして非常に

びっくりしたのですが、そんなことになっていたのでしょうか。

○立教大学・村上委員

実を言うと、ＪＴＢさんのバーチャル修学旅行にヒントを得て、バーチャル修学旅行っぽい動画を上げている人とかがいます。

今年度、東京都立の高等学校は就学旅行が実施されないところが結構あるのです。東京都の教育委員会が何と言っているかというと、保護者会を開きなさいと。保護者の８割以上の賛成が得られない限り、修学旅行をやらなくてもいいという指示が出たそうです。多くの学校で保護者会を開いた結果、全体としての数は分かりませんが、私の教え子が教員をしている学校では８割が中止になったそうです。また、来年２月に実施予定の修学旅行が中止になったそうです。

それには２つの理由があって、コロナ禍だから行かないというのは、説得がうまくできていない、つまり、家庭内感染が激しいならば、家庭にいないことの方が安全なんですよ。そうであれば、電車に乗り、行った先で旅館に泊まればその方が家庭にいるより安全なんですよね。実際にそうで、旅館で感染者が出ている比率はそんなに多くありません。

修学旅行の取り回しというのは、コロナ禍の中でも比較的安全であるということが周知できていないということがあります。その一方で、修学旅行の目的が、教育目的として大切なのだという意識が、保護者の中に欠落してきているのではないか、という気がしています。

センター長のお話で面白かったのは、自分の土地の話を他の地域に説明しようとする話だと、皆が賛成する一方で、よそに行こうとすると「それは価値があるのか」と学校が言うこともあり、ついていってやるぜ、みたいな認識になっているのです。

そのギャップみたいなものを、文科省をバイブルとして仕事をされる際に、御社の中で出たりはしてないでしょうか。修学旅行に対する、学校、保護者、生徒の認識と、未来の教室でやられてた学校や生徒の認識についてはギャップがあると思うので、そのギャップに関して、会社の中で、修学旅行ってもう少し改善が必要だね、といった話は出なかったでしょうか。

○株式会社 JTB・中野氏

それは、当社の中では根深い問題です。コロナの数年前から、当社の新入社員が口をそろえて、社外での研修会で我々にいうことが、自分たちが仕事をしているにも関わらず、修学旅行がなくなると思いますということを言うんですね。その感覚の肝は何なのかというと、肌感覚ですということなのですが、皆、口をそろえて言います。それを不思議だなと思っていたのですが、時代の空気感のようなものかもしれませんし、世代が変わってきて、保護者が修学旅行をそれほど重要視しないというか、人によって温度差はあると思いますが、世の中の大きな感覚の中で、修学旅行の重要性の占める割合を考えると、質量が軽くなっているのは間違いないと思います。

500 人でいく大型修学旅行みたいなものが、いまや、瓦解をしていて、1 つのコースはが 60 人、マックス 80 人までしか行けませんというようなことがあって、個別選択で、海外もあれば近場もあって、それは経済的な問題も絡んでいるとは思いますが、団体行動の見本というか、昔の就学旅行の形が、だいぶ時代背景の中では薄らいできている感はあります。

○立教大学・村上委員

戦前戦後の修学旅行の大きな目的の１つに、旅行教育というのがありましたよね。沖縄では、

電車に乗ることは外せないということがあったのですが、そこが変わってしまったのかもしれませんね。

○株式会社 JTB・中野氏
　ただ、難しいですよね。個別最適みたいなところが、教育界に浸透してきていて、その方向にベクトルが向いてくると、当たり前のように、300~500 人で行くような団体行動が必要なのか、枕投げをすることにどれだけの意味や価値があるかという話にはなってしまい、そういう時代の入り口に入っている感じはします。

４．意見交換
①観光教育の「意義・目的」について　（約 25 分）
②観光教育で育む「資質・能力」について　（約 25 分）

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員
　原先生のお話の感想なのですが、偏差値の高い学校で、学生が教養を学んだり、中程度のところは云々という話があったのですが、当校はまさに、中程度の偏差値のところに存在していて、大学入試の準備で日々の学校が終わってしまい、なかなか教養の部分までいきづらいという実態があります。
　教科に縛られると、どうしても教養の部分は見えにくくなるので、修学旅行はとても良い機会だと感じています。
　生徒の認識と保護者の認識のギャップの問題なのですが、ＪＴＢさんでは、この認識のギャップをどのように埋めていこうと考えていらっしゃるのでしょうか。それが未来探究ゼミナールだったりもすると思うのですが。

○株式会社 JTB・中野氏
　ストレートかつパンチの効いたご質問をいただきました。我々の生命線に関わるところではあるのですが、いずれにしても、日本の人口減少とともに、マーケット規模は小さくなることは誰もが理解しています。さらに、細分化して、手間がかかって、コストが掛かることは、どうしようもないと思っています。
　我々は修学旅行だけをやっているわけではなくて、一般旅行業というか、旅行業務としての取扱いだけでは今後生き残っていけないので、僭越ながら、ツーリズムの世界の枠組みを捨てずにかつ、教育ソリューションの領域に入っていくことで、学校に良いパートナーとして認めていただくことを考えています。
　学校のマーケットだけではなく、企業相手の一般企業のマーケットでも同じで、総合旅行業で、切符の手配などしているだけでは、右肩下がりなので、そこで得た、知見、経験則などを元に、体験学習や探究学習も含めて、ソリューションを展開できる方向性を考えています。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員
　保護者や生徒の認識ギャップを埋めるのも、我々教員の工夫次第というところもあるのかなと思っています。他の事例でも同じような話を聞いたことがあって、ＪＴＢさんのようにポジショ

ンを取っていくという話だったのですが、どのように取っていくのか気になって質問しました。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

当校も、修学旅行は全員参加の必修にはしていない状況です。団体で出かけることに対して、団体で出かけるからこそできることは、団体故の制約が大きくて、旅行というものをやるからには、何らかの形で出かけたことに対する意義を見出していこうと考えると、どうしても個別に、それぞれの目的にあわせて分散してくことになっていきます。

また、団体旅行をしづらくなってきていることもあって、例えば沖縄に行こう、台湾に行こうと思っても、１学年 300 人ほどいるのですが、飛行機がどんどん小さくなってきていて、１回で移動できないんですね。そのようなことも考えた時に、団体旅行というもの自体が、インフラとしては、京都にでも行かない限りはできなくなってきている状況にあるため、縮小していったという経緯もあります。

また、保護者の方の意識も変わってきている中で、お金を預かって、生徒をどこかに連れていくからには、教育的なものでなければいけないという考え方は、教員の中では根深いです。

それはそうなのですが、実は、もう少し進んでいかなければいけないのではないかと思っていて、お金を預かったからにはつれていき、教育的でなければいけないというのは、いまだに教育現場での教員の授業の枠組みの中での感覚で語っている教育になっている気がします。その中で、観光教育の意義目的は、積極的にいって、教科書的なものを学ぼうとしているわけではないのだけど、肌感覚として生徒がどこかに出かけることによって、何かを学ぶんだよね、それがきっかけとして、これからにつながるんだよね、ということを教員ももっと共有しなければいけないし、保護者にも理解していただいて、この旅においてすべてを学ぼうとは考えないで、自分たちの発想の中では考えなかったような旅を学校が提供するような、そういったものを実施すれば、もう少し学校の中での旅ができるのかなと思います。そもそも、修学旅行という呼び方自体も変える必要があるかもしれません。

○日本大学・宍戸委員

教育旅行や修学旅行は研究しているのですが、文科省では「修学旅行を学習指導要領に位置づけてこうやる」という意識が現場に浸透しており、修学旅行でこれを学ばなければならないというのは、縄で縛られているような印象も一方ではありますね。

もちろん、目的なく旅して遊びましょう、では目的が達成できないし、お金を預かった意味がないこともわかるのですが、事前事後の学習も含めて、科目との整合性等を意識するあまり、視野を広く持つようなところと矛盾するような縛られて、広い目を持っていくことと矛盾するようなものになっていて、逆に緻密にしようとしすぎているところ全体的に感じています。

一方、旅行会社さんが提供してくるものは画一化されたものも多く、修学旅行の在り方が、今問われているのは事実だと思います。

先日、専門学科の中で話をした時に、専門学科の学生は、比較的、大学進学をする学生も増えてはきたのですが、やはり、学力試験を通っていく学生たちが少ないので、就職する学生も多いです。

社会とつながりを持って、社会の中で活躍をする場を持つことが観光教育によってできるという声がたくさんあって、我々の見立ての中では、普通科教育というのは、どちらかというと、外

に出ていく機会がなかなか持ちにくいのではという話が出ていました。一方、高校の専門学科は、社会の仕組みを学んだり、つながったりするための実践を学ぶ科目があったり、課題研究や総合実践などが強みで、社会とつながることを学ぶ、地域とつながることを学ぶ科目として、観光教育は意味があるという話になっていました。

普通科教育においても、社会とのつながりもたくさん出てきますが、どういう科目や機会を利用するのかというところが一番難しいのかなと思っています。

高嶋先生のように、自分で科目を作って、生徒を連れ出せる方はいいのですが、なかなか一般的な普通教育としては、やりにくいところもあります。

先ほど話に出た修学旅行のような機会は使い勝手がいいので、そこをうまく活用するということになるのかなと、お話を聞いていて思いました。

普通科教育も、考え方としては大学につながっているので、我々専門学科から見た印象としては、あまり外に出ていくという印象がなくて、見学や視察は断片的にはあると思うのですが、専門学科の場合は、地域とコラボしてプロジェクト的にやっているような活動が多いんですよね。

また、高校生ながら、結果を求められるので、そこが強みなのではないかという話が出ていました。普通科はそこまではいかなくて、自分の関心に基づいて調べたり、地域に出たりはするのだろうけど、そこからアクションとして地域の人たちと一緒に動いたりということはあまりなくて個人で完結するイメージがあります。

〇法政大学国際高等学校・高嶋委員

外とのつながりを普通科の中でやっていくというのは、学校全体が何を目的としているのかにおいて、普通科というのは、どうしても大学の進学が目的であるため、学校全体の雰囲気としてマストではないわけなんです。もちろん、我々の学校でも、総合的な学習の時間を使って、地域とのかかわりをしていこうとか、授業でやっていることはあるのですが、学校全体が目指しているものに対して、それに合わせて生徒自身が伸びていくことができる機会を提供する、言い方はよくないかもしれないですが、付け加えてという感じになってくるわけですよね。

それを、どんどん拡大していって、高校生のうちに、地域との関わりを実感して、成長することが大切だという理念は理解してくれるのですが、一方で各教科の先生は、自分の担当している科目の単元をいかにちゃんと終わらせるかがあって、そこを踏み越えてくると拒否反応が出てくるということがあります。

最終的には、何がうちの学校の目的なのかというと、やはり単元を終わらせて大学に送り出していくということが普通科の中にはあって、宍戸先生がおっしゃるような状況は確かにあると思います。

〇立教大学・村上委員

中野さんのお話からはずれてしまうかもしれませんが、宍戸先生のテーマで、僕の経験からいうと、日本は社会との連携で、高校生が社会にでてヒアリングするとか、そういったことができないわけではないし、キャリア教育といっているもので、僕の感想だとちょっとエセな感じはするのだけど、商店に行って商店の話を聞けないわけではないんですよ。ただ、世界的にいって、日本はとても稀な国で、特に先進国は、町の中を歩くのは今でも危険なんです。

ニューヨークも少しは良くなりましたが、ニューヨークで生徒を町の中に出して、意見を聞い

てこいというのはすごく難しくて、そのために、どういう仕組みを作るのかという教員のアクションリサーチが「世界男子校会議」の大きなテーマの１つです。

生徒を連れて、志賀高原に行った話を報告したのですが、彼らは社会問題があって、無職の高齢者がどうやって暮らしているのか調べたいというと、調べるための相当な準備と、それを補佐してくれるボランティアグループを用意して、生徒たちがヒアリングをしに行って、帰ってきて自分たちが得た学習の成果を学校の中で討議していく形になるのです。

そこまで日本は危険ではないですが、社会の中で生徒たちがきちんと学べる準備をするというところが、実は日本では欠落している気がします。

一方で、日本ではほとんど問題にならないのですが、海外の高校生が、地元の女の子や、女子高生に声をかけてしまうという問題があって、指導の上での問題になっているんですね。

日本の場合、宍戸先生が、普通科ではそれはどうなのかとおっしゃいましたが、専門学科はそれがシステム化されていて、地元の商工会や組合を通じて等し、そこも組織化されているので対応してくれます。しかし、普通科の場合は地域が対応してくれるのが精一杯で、生徒の社会連携を受けれる仕組みがあまり出来ていない気がします。

それが出来て、それを旅行につなげることができれば随分よくなると思います。都市ではなく、例えば沖縄に行って、戦争遺跡を巡るといった時に、対応してくれる地元に人がいるかなど、そのあたりのアクションリサーチを先生方がしないと、実際には修学旅行が無意味なものになってしまいます。その余波がＪＴＢさんあたりにいってしまって、ＪＴＢの若い社員の方たちががっかりしてしまうという、その責任は、学校や地域の側にあると思われます。

○日本大学・宍戸委員

専門学科の中にも、就職や現場に出るだけではなく、自分の立ち位置を考えたり、普通教育的な観点での観光教育の役割はあると思うのですが、やはり、専門学科の場合は、プロデュース力を磨こうとか、実務につなげていくために、社会に出て実践を積もうということが重視されていて、ほとんどの学校は外に出ていく教育が多いんですね。普通学科の場合は、自分を見つめたり、社会を見つめたり、これからどう生きていくかとか、言い方は悪いですが、自己完結していい世界なのかなと、思い込んでいた部分がありました。どっちも飛び出していいと思っているのですが、大きな方向性の違いとしては、我々は勝手にそのように議論していました。

○立教大学・村上委員

中野さん、いかがでしょうか。学校が社会と連携するという時に、修学旅行だと、沖縄のガマ見学の例がありますが、地域が協力してくれて色んな体験を与えてくれるというのは、相当長い歴史がある気がします。そういうことに対して、学校側の反応はいかがでしょうか。あまり賛成してくれないのか、それは商品の一部だと思ってしまっているのか。

○株式会社 JTB・中野氏

今は、着地型みたいな言い方をするのですが、修学旅行に代表される旅行の着地が、意識の真ん中にきてしまうんですよね。着地した先で、一体どんな受け入れや交流が待っているかということを重要視して、着地の地域の方々との交流や、社会に近づくとか、開かれた社会を見せるといったこと等、平和学習みたいなものを含めて一生懸命やろうという形になっています。そこは

全く問題ないと思います。

先ほど、宍戸先生が、結果をだすというフレーズをおっしゃったのですが、我々は結果もそうですし、成果を見せることが、旅行にかかわる、もしくはかかわりたいエージェントとしての、１つの進むべき道だと思っています。

本日のテーマの１つだと思うのですが、ｐ10 に資質能力について書いてあって、この資質能力を少し読み替えて、我々が提供する行事や、旅行、研修などが、どのぐらい生徒の資質能力を変えたのか、みたいなことを、提供する側としては見せていくべきだと考えていて、横文字にすると、コンピテンシーみたいな言葉になるのですが、暗黙知、非認知能力みたいな言葉で表されるようなことを、経産省から事業を委託されている IGS 社のアイグローシステムがあって、そこと協議をしています。今、我々は旅行行事のトータルデザインのようなことを一生懸命やっているのですが、相乗効果をうまく使いましょうといったことを提案させていただいているのですが、そのエビデンスとして、どのぐらい生徒のコンピテンシーが変わるのか、資質能力がどう動いたのか、変容したのかを一緒に提供するというトライをしています。

BUZZPORT さんの観光甲子園も我々一緒にやっているのですが、3 分間のプロモーションムービーを作って、そこに参加した生徒さんに、アセスメントの Ai Grow を入れさせていただいて結果を出したところ、観光甲子園に参加している生徒さんが前向きな生徒さんだったということもありますし、先生方が力を入れて指導していることもあるのですが、３ヶ月程度でコンピテンシーレベルで、ものすごく変容があったことが認められました。

課題設定、創造性、表現力、影響力の行使、地球市民みたいな考え方のコンピテンシーなど、が大きな動きとしてデータとして取れてきています。参加していただいた学校に対しても、データを見える化して、エビデンスベースみたいな形で提案させていただこうと一生懸命やっています。

〇立教大学・村上委員

ISO（国際標準）とも関係していると思います。ISO には品質という概念があって、品質の概念は、商品が機能的に持っている品質と、標準・規格の利用能力である「力量（コンピテンシー）」と機能とのマッチングがあるなかでマネジメントを企業がします。

それと同じことをサービスでもやっていて、その考え方を、学校教育の中に持ち込むと、教員が持っていない機能を社会が持っている時に、生徒たちが何かの力量をあげたければ、学校＋社会の組み合わせの中で、その力量を達成することができるという仕組みをつくることが重要です。

UX（ユーザーエクスペリエンス）の議論ですね。自分の人生やキャリアの中に、自分のやっていることをどのように位置づけるか、それを企業側はどう説明するかという話になるのですが、難しい言葉でいうと、UX になるんですね。観光庁の事業として、まだ UX の議論を出すのは早いと思っていたのですが、今のお話はまさにそれです。コンピテンシーは、我々は力量と訳します。

なぜかというと、先ほどの課題設定とか、フレームの設定などを統合するような力なのですが、特に普通科において、この力量が重要です。キャリア評価をする仕組みがヨーロッパにあるのですが、それが上に行くにしたがって、力量が重視されることになっていきますので、普通科の段階で、それぞれの教科の成績というものと、教科を融合して自分の能力を高めるということは違うと考えていて、教科を超えて、融合していくのは、力量に近いものなのですが、それができな

いと、大学に入って管理職にまで成長していかないというのが、専門職教育のフレームなのです。
　おそらく普通科においては、今おっしゃった学校教育だけではなくて、学校と社会の組み合わせの中で、自分の力量を作っていくというその話が、実はすごく重要な話だったと思いますね。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員
　大学の学びとか、子どもの自己肯定感の低さ、完璧主義という話があったかと思うのですが、今の学校教育の中で、僕が感じているところは、例えば、小学校の先生が、学校の方針に寄せていくというか、僕は理科教員なので、外で実験教室等をやる機会があるのですが、自由にしていいよと言いつつ、教員が口出しをして、先生の意図の方向に子どもたちを寄せていくところをよく見かけます。そういったところが、子どもたちの自己肯定感の低さや、こうでないといけないという完ぺき主義という思想につながっていると感じます。
　今回の、観光という枠組みで自分の生き方を考えることは、新しい学校を目指す上で、すごくいいと思って話を聞いていました。
　学校で何をやるかということも大事なのですが、当校でも探究学習という枠組みの中で、色々やっているのですが、生徒にやってもらう以前の話で、教員が生徒とどのように関わればいいのか教員が戸惑っていて、中身のコンテンツも大事だし、生徒がどのように変わっていくかという外方向を継続するということも大事なのですが、学校の教員試験で、どう動いていったらいいかというと、僕の中でイメージがつきにくい部分があります。

○立教大学・村上委員
　それは、第三回あたりで議論しましょう。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員
・感想ですが、観光教育に関心を持ち、議論をする人たちは、観光産業というように捉えている部分ももちろんあるのですが、非常に教育的なものなのだと実感をして、観光を教育につなげていこうとしているのかなと思います。産業界がどういう実態になっているかということを、解説するということではなくて、教育なのだというところに、重きがついているのかなと思います。
　我々は、やればやるほど、観光産業に直接つながるものではない、教育的なものなのだと感じるものと、周辺の観光教育といったらホテルでの働き方の解説なんでしょとか、そういう風に感じる人たちとの間のギャップを皆が感じているということかなと思います。
　どうやったらこれが教育プログラムなのだ、我々は教育を議論しているのだということを理解してもらえるかと考えていて、今日の議論ではまだ、一定の方向性は見いだせていないと感じます。
　検討事項１、２であがっていた目的・意義というものが、誤解されずに伝わっていくかという形をこの協議会で作っていかないといけないと思いました。

○日本大学・宍戸委員
　原先生の話で哲学的な観点とか、それぞれ持っている美意識とか、観光や旅行が色んなものを気づかせてくれたり、磨くことができるというのは、本当にその通りだと思います。それについていかに、我々が観光を通して学ぶかをいかに伝えられるかが、大事だと思っています。

専門学科の場合は、先ほど言ったように実践的なものやキャリア学習に近づいてくるのですが、普通科の場合は、もしかするとキャリア教育ということをあまり持ち出さない方がいいのかなというところがあって、今の教育って知識をインプットする傾向にあって、学習としての成果として、レポートを書いたりプレゼンをする機会はあるのですが、本当に自分のやりたいことを発見しているのかが疑問です。どんどん、型にはまっていくような気がしています。

そうした時に、旅って、自分の好きなものを見つけたり、気づいたり、こういう旅をしたいとか、消費をしていく中で、自己表現されている部分があって、人との違いを表現することができますので、そのあたりを先生方や一般の方にどう理解していだけるかが難しいところがあります。

ただ、わかっていただけると、例えば芸術の先生にはそうだと思っていただけたりとか、観光の色んな要素について、各科目の先生方が、心の中で思っている大事なことを響かせられる気がするんですよね。

そのあたりをうまく表現できないかなと思いました。

○立教大学・村上委員

今日の議題の課題については、全部終わったと思います。

5つの論点についても終わったし、意見交換で、2つの意義目的、資質能力についても終わったと思います。なおかつ、少し先まで行きました。

今日は哲学的な議論をしたので、ある意味、観光教育を通じて我々が社会の中の人間、社会の中の人、あるいは人がつくる社会について、どのような展望を持ったらいいのかについて、知見を得たと思います。

また、中野センター長のお話も非常に有効で、修学旅行と探求型のプログラム、2つのお話がありました。また、実際の学校の生徒や保護者との考え方のギャップがあるというお話もありました。

最後に、それをどのように評価していくかという話がありまして、能力・知識・スキル・コンピテンシーというのは、基本的なキャリアの構成要素なのですが、キャリアに限らず、コンピテンシーをどうやって上げるかが重要だというお話がありまして、それには私も賛成です。

最初の議論との間でそれを検討すると、結局、美意識や世界観が育たなければ、自分がどう取り組んだらいいかという自分の構えができないので、それができないと、実は観光産業も前向きに発展していくための資源を多く失ってしまうことにつながります。

観光産業がコンピテンシーを評価していくことは、ある意味、観光教育の正義を知る機会が得られるのではないかと思います。それを大学から始めるのではなく、高校の普通科、または専門科から始まっていくのではないだろうかということです。

○観光庁・刀根

ありがとうございました。

色々お話を聞いた中で、自分が今社会人として働いているところで、例えば美意識に関するものや、秩序、観点などについてのお話がささっております。

もしそこが、観光教育の中で、何か子どもたちの意識変革につながるものがあるとすごく面白いなと思ったのと、それが多分、教員の方々にも同じように、自分が持っていないものとしてささるのだろうなと感じました。

○立教大学・村上委員
　面白かったですか。

○観光庁・刀根
　面白かったです。

○立教大学・村上委員
　それなら良かったです。平川さん、今日の意見をうまくまとめられますか。

○事務局・MURC 平川
　それぞれの分科会に出席させていただき、それぞれ少しずつ違う部分も、オーバーラップする部分もありながら、うまく役割分担をする形で、議論を進めていただいている印象です。本日いただいた意見、特に、美意識、価値観、哲学的な部分、教養等、もう少し出すことについてやらせていただこうと思っています。
　また、資質能力の部分についても、他の分科会の意見をミックスする形でどういうやり方が考えられるかといったところは、改めて事務局側で検討させていただきます。

○立教大学・村上委員
　ありがとうございました。またご意見等ございましたら、私のメールにご意見いただきたいと思います。

５．事務連絡
　・次回の第 3 回合同分科会は、1 月 19 日（火）15：00 合同開催

以上